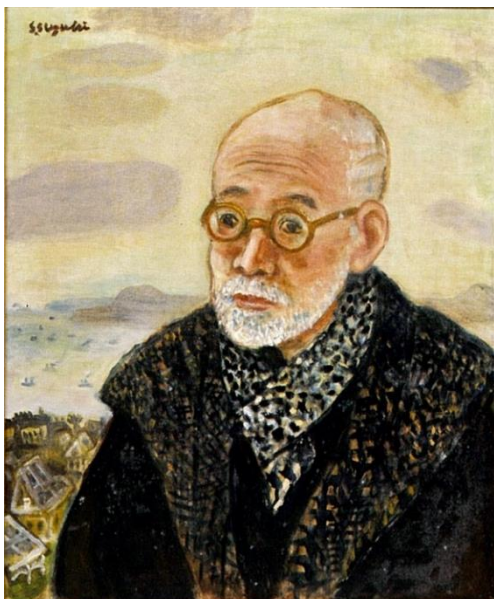


## 渋谷区立松濤美術館



### サロン展「斎藤茂吉—歌と書と絵の心」

会期：前期 2月11日（日）～2月25日（日）

後期 3月3日（土）～3月18日（日）

開館時間：午前9時～午後5時

（最終入館：午後4時30分）

休館日：2月13日（火）、19日（月）、

2月26日（月）～3月2日（金）、

5日（月）、12日（月）

入館料：無 料

主 催：渋谷区立松濤美術館

特別協力：公益財団法人斎藤茂吉記念館

後 援：山形新聞・山形放送

《斎藤茂吉肖像画》鈴木信太郎画 1952(昭和27)年 油彩・カンヴァス 59.5×48.5cm 斎藤茂吉記念館所蔵

### 【展覧会概要】

斎藤茂吉(1882～1953)は近代日本文学において優れた業績のある人物です。歌人、作家そして精神科医でもあった茂吉は、1882(明治15)年5月14日、山形県金瓶かなかめ（現山形県上山市）に守谷伝右衛門の三男として生まれました。茂吉は40～50代にかけて自宅のある青山から道玄坂の鰻店「花菱」によく通ったように、渋谷との関係も深く、渋谷に関する歌も数多く作りました。

正岡子規の精神を継いだ近代写実主義を標榜する短歌結社アララギの中心人物として、自らも独自の写生説をうちたてた歌人ですが、幼少より絵画作品に興味を持ち、それに関する多くの美術批評も執筆しました。また、ドイツ留学時代に持ち帰った複製画を歌誌「アララギ」の表紙に使い、一枚一枚に丁寧な解説文を書いており、そこには茂吉の絵に対する深い愛着と、鋭い批評眼がみてとれます。

そして、終戦後の1946(昭和21)年から1947(昭和22)年にかけての山形県大石田町滞在中には、本格的に絵筆を執り絵画作品を遺しました。本展は、茂吉の幼少期から晩年に至るまで、生涯の活動を伝える歌や書、絵画、遺愛の品、渋谷との関わりを114点の作品や資料を通して構成します。茂吉は、対象の在り方を現実的に観入り、聴き入り、そして物事の真実の姿を把握する「写生」という独自の論を確立します。こうした短歌を作るうえでの姿勢、信念は短歌だけでなく、書や絵にも表現されています。本展では、日頃、短歌に馴染みの薄い方々も、近代短歌史における茂吉の文学的世界を身近に接していただけることと思えます。

## 【展示構成】

### 第一章 茂吉の人物像

山形県南村山郡金瓶村(現山形県上山市)に農家を営む守谷家の三男として生まれた斎藤茂吉は、蔵王山麓の自然のなかで絵や書道に親しむ幼少年期を送った。14歳で上京した茂吉は、当時浅草で医院を開いていた親戚筋の斎藤家に将来の後継ぎとして迎えられ、開成中学校に編入学し、後に養子となって斎藤茂吉を名乗ることになる。そして、第一高等学校から東京帝大医科へと進学、医学の道へと進んで行く。茂吉は作歌や文芸・美術評論を本業である医業とは明確に分ち、「作歌はやはり業余のすきびといふことになるわけである」(歌集『寒雲』巻末記)と称しながらも、旺盛な歌に対する関心と、随筆、歌論、評論に多才を発揮し、1953(昭和28)年2月25日、心臓喘息で70歳9ヶ月の生涯を閉じた。



《風絵「桃太郎」》 斎藤茂吉画 1895(明治28)年頃 紙本着色  
58.5×37.0cm  
斎藤茂吉記念館所蔵

### 第二章 歌人茂吉

茂吉は第一歌集『赤光』から歌集『つきかげ』まで17冊の歌集を発行し、約一万八千首の歌を残した。

1905(明治38)年に茂吉は家業を継ぐべく東京帝大医科に進学するなど、順調に医学の道を進むかと思われた。しかし、歌の世界にひかれ正岡子規系歌人の伊藤左千夫に入門した。その後、実母いく、左千夫の相つぐ死去などを契機に、ひたむきな抒情を打ち出した連作「死にたまふ母」「悲報来」などを収めた第一歌集『赤光』により、無名に近かった茂吉の名は一躍高められた。

1917(大正6)年には、長崎医学専門学校に教授として赴任し、自らの作歌姿勢を示した「短歌に於ける写生の説」を歌誌「アララギ」に連載し、「実相に観入して自然・自己一元の生を写す」という写生の解釈を定めていく。



《南瓜図》  
たまきはる命いき  
むとはしきやしこ  
の畑つ物も食はざ  
らめやも「短歌拾  
遺」所収(昭和二十  
年) 斎藤茂吉画賛  
1945(昭和20)年  
紙本・墨書着色  
74.2×29.0cm



《実相観入》 斎藤茂吉書 紙本・墨書  
54.0×26.8cm 斎藤茂吉記念館所蔵



《くれなゐの大き牡丹の咲くみれば花  
のおほきみ今かがやく》  
歌集『白桃』所収(昭和8年) 斎藤茂吉  
1943(昭和18)年5月10日  
紙本・墨書 36.0×6.0cm  
斎藤茂吉記念館所蔵

### 第三章 歌をつうじた交流



《阿部次郎宛絵葉書》  
斎藤茂吉ほか 平福百穂画  
1914(大正3)年2月11日  
葉書・ペン淡彩  
14.0×9.0cm

正岡子規の遺稿集『竹の里歌』に茂吉が感銘を受けたのが1905(明治38)年、23歳の時であった。1906(明治39)年3月18日、歌の師となる伊藤左千夫宅を初めて訪問し、以後作歌の道を本格的に歩み始めることになる。

作歌活動を通じた交友は多彩で、歌誌「アララギ」を中心に茂吉を支えた同人たちには島木赤彦、古泉千樾、<sup>こいづみちかし</sup>平福百穂<sup>ひらふくひゃくすい</sup>、中村憲吉、土屋文明らがいる。

### 第四章 茂吉と渋谷

茂吉が欧州へ留学していた1921(大正10)年から1924(大正13)年にかけて、歌誌「アララギ」は一時期島木赤彦の自宅があった代々木山谷より発行され、渋谷には多くのアララギ歌人が集まり活動した。

斎藤茂吉もまた渋谷ゆかりの歌人であり、渋谷を取り扱った作品を多く残している。鰻好きとしても知られる茂吉は、鰻にまつわる歌を詠み、歌誌「アララギ」に自身の鰻の嗜好についても語っている。

### 第五章 美術と茂吉

幼少の頃より絵を描いたり、スケッチなどをするのもあった茂吉だが、着色した本格的な絵画を描き始めたのは、終戦後の六十三歳からであった。

茂吉は早い時期より「短歌は直ちに『<sup>いき</sup>生のあらはれ』でなければならぬ。従つてまことの短歌は自己さながらのものでなければならぬ」という認識を持っていた。こうした「生のあらわれ」を表現するかのよう、作画においても決して饒舌な描写ではないが、誰の真似でもなく対象と茂吉が向き合い、丹念に描かれた、やさしく、柔らかい、温かみのある作品を残している。



《芍薬図》  
斎藤茂吉画  
紙本・着色  
66.4×31.8cm

## 【会期中のイベント】

### ◎ワークショップ：「自作の短歌で色紙を作ろう」

短歌を作り秋葉氏が添削後、参加者ご自身で色紙に浄書します。

初心者でもお子さんでも参加できます。

講師：公益財団法人斎藤茂吉記念館館長 秋葉四郎氏

日 時：2月17日（土）午後2時～午後4時

会 場：渋谷区立松濤美術館 B2 ホール

入館料・参加費：無料

定 員：20名

\* 申込み：締め切りは過ぎましたが、若干余裕がございますので、電話にて追加受け付け中。定員になり次第、締め切ります。

### ◎講演会：「斎藤茂吉 東京を歌う」

講 師：公益財団法人斎藤茂吉記念館館長 秋葉四郎氏

日 時：3月3日（土）午後2時～

会 場：渋谷区立松濤美術館 B2 ホール

入館料・参加費：無料

定 員：先着 80名

\* 申込み：事前予約の必要はありません。

\* 直接、松濤美術館（地下2階ホール）にお越しください。

### ◎当館学芸員によるギャラリートーク

日 時：2月18日（日）・3月9日（金） 各回午後2時～

入館料・参加費：無料

\* 事前予約の必要はありません。

### ◎ひな祭りコンサート—フルートとシンセサイザーの出会い

出演者：齋藤友紀（フルート）、丸山貴幸（シンセサイザー）

日 時：3月4日（日）午後2時～（1時間程度）親子で楽しめる曲を1時間程度演奏。

会 場：渋谷区立松濤美術館 B2 ホール

開 場：午後1時30分

入館料・参加費：無料

定員：先着 80名（午後1時より B2 ホール前で整理券配布）

お問い合わせ：渋谷区立松濤美術館 〒150-0046 東京都渋谷区松濤 2-14-14

電話：033465-9421 FAX03-3460-6366

展覧会担当：吉井 [yoshii@shoto-museum.jp](mailto:yoshii@shoto-museum.jp)

広報担当：大平 [ohira@shoto-museum.jp](mailto:ohira@shoto-museum.jp)

※広報用画像もご用意しております。